

くま がや ふん か ざい  
**熊谷の文化財**

に ほん せい こう かい くま がや せい きょう かい  
**日本聖公会熊谷聖パウロ教会**

「日本聖公会熊谷聖パウロ教会」(熊谷市宮町)は、大正8年(1919)に着工から4年の歳月を終って完成しました。礼拝堂は鐘楼を持つ平屋建ての構造で、鐘楼の1階部分が入口ポーチとなり、礼拝堂の東側にベストリー(礼拝準備室)が位置しています。当初、建立時の屋根は茶褐色の洋瓦でしたが、戦後に日本瓦に葺き替えられました。入口上部の鐘楼には十字架が置かれ、日本聖公会の原点にあるイギリス国教会のデザインを引き継いでいます。建築面積は141㎡で、南北の縦幅は約16m、東西の横幅は約7mです。



教会の壁などには、汲沢栄一が設立に関わった、深谷市の「日本煉瓦製造株式会社」の工場で焼成された上質なレンガが使用されました。平成時代に実施された床の改修工事の際に、床下のレンガに「日煉」という刻印があることが発見され、同工場で製造されたことが明らかになりました。

外壁と内壁はレンガを積み重ね、それを支える木造の小屋根みや窓枠にはケヤキが用いられています。レンガは「イギリス積み」に分類でき、一段ごとにレンガの長さが異なる手法が用いられています。「ポンテッドアーチ」と呼ばれる窓枠には透明なガラスが組み込まれており、内部には柔らかな日差しが差し込みます。

教会前面には祭壇があり、上部には「シザーストラス」、「ハンマービーム」と呼ばれる木製の柱の構造が重い屋根を支えています。礼拝堂入口には同じくレンガ造りの門があり、教会へ優しく導いてくれるかのような勢曲気を感じます。



熊谷聖パウロ教会を設計したウィリアム・ウィルソンは、立教大学の礼拝堂や校舎、日本聖公会川越基督教会なども手掛けている建築家であり、国内でのレンガを組み合わせる建物に多くの力を注ぎました。大正12年(1923)の関東大震災や昭和6年(1931)西埼玉地震にも耐え抜き、また終戦直前の熊谷空襲による火災被害からも免れ、現代に引き継がれています。

平成17年(2005)に国登録有形文化財となった熊谷聖パウロ教会の礼拝堂と門は、熊谷地域のモダン建築を今に伝える遺産です。